

【プレスリリース】相模原市にワイナリー誕生！相模原ワイン完成間近！

相模原市で醸造用ブドウの栽培及び自社ワインの販売を行っている『ケントクワイナリー』（本社：大森産業（株）、相模原市中央区高根）は、1月11日付けで果実酒製造免許を取得し、『相模原ワイン』の醸造に着手する。生産から醸造までの全ての工程を自社で担う、ドメヌ・スタイルのワイナリーが誕生する。

同社は、2021年3月26日に相模原市が『さがみはらのめぐみワイン特区』として認定されたことを受け、市内へのワイナリー設立に向けた準備を進めてきた。醸造所は相模原市中央区上溝に設置され、2023年シーズンから本格稼働に向けて動き出す。

『ケントクワイナリー』を運営している大森産業（株）は相模原市に本社を置き、厚木市に自社工場を構える創業45年の神奈川県指定の産業廃棄物の中間処理業者であるが、育ててもらった相模原市に恩返しをしたいという思いから、2014年に農業法人『八咲生農園』（やさいのうえん）（本社：相模原市南区相模大野）を設立。代表取締役の森山謙徳（もりやまけんとく）氏が『夢のある農業を！』と、2015年ごろから醸造用ブドウの苗木の定植を始め、現在では、約7,000㎡の敷地で、欧州品種を中心に13品種、約3,300本の醸造用ブドウを栽培。ワイン用ブドウ園としては県内最大規模となっている。

神奈川県内をはじめとした都市部には、自社農園を持たずにワイン作りを行う、『都市型ワイナリー』と呼ばれるワイナリーが多数存在している。産地から仕入れたブドウを使用し、醸造所のみを運営するスタイルは、農地の少ない都市部に順応したものであると言える。しかし、近年では『都市型ワイナリー』においても、ワインの付加価値を高めるため、地域農家との連携や、自社農園を持つ動きが広がっており、今後更に加速することが見込まれる。都市部に所在するアクセス良好な相模原市で、ブドウの生産から醸造までを一貫して行い、地産地消に繋げることが出来れば、『都市型ワイナリー』の一步先の可能性を見いだせるかもしれない。同社が先駆者となって道を切り開き、都市部のワイナリーの未来を見据える試金石になれば後に続く者たちが現れるはずだ。

一般的に、日照量が十分あり、昼夜の寒暖差が大きく、成熟期である夏に雨が少ないことが、美味しいワインを生み出すブドウの条件と言われている。神奈川県は決して栽培に適した気候条件を備えているとは言えないが、気候に適した品種を選定し、十分な日照が得られるよう工夫を凝らした樹形にし、雨を溜めないよう果実を丁寧に摘果し、手間暇をかけて大切に育てることで、産地にも劣らないブドウの生産も可能だ。人口の多さと都内からの良好なアクセスを追い風に、潜在ニーズが掘り起こされれば、地域の発展に繋がるだろう。

『ケントクワイナリー』が販売する2020VT（ヴィンテージ＝収穫年）はすでに完売し、現在リリース中の2021VTも残りわずかとなっている。

2022VTは委託醸造最後のシーズンになる為、従来の委託先を3社から6社に拡充して商品のバリエーションに厚みを持たせる予定だ。天候不順で決してブドウの出来に納得のいくシーズンではなかったが、収穫量は5トンと、昨年より1.2倍に増えた。年々商品数を増やし、リリースするワインのクオリティも上がっている中で、自社醸造へ切り替える意味合いは大きい。生産から醸造までの全ての工程において、自分たちの目指すワイン作りを一貫して行うことで、更なる付加価値向上を追求出来るためだ。今後は、ワイン作りだけにとどまらず、市内他業種との連携などをとおして、ワイン以外の商品作りやイベントも企画される予定で、交流人口の拡大にも期待が寄せられる。

今までは『神奈川にワイン文化を！相模原にワイナリーを！』と活動してきた同社だが、これからは『神奈川にワイン文化を！相模原を中心に！』をスローガンに、相模原ワインを拡大していく予定だ。ワインを相模原市の特産品として根付かせることができれば、シビックプライドの醸成にも繋がるだろう。

『都市型ワイナリー』と『ドメヌ・ワイナリー』相反する二つのスタイルを組み合わせた新たなワイナリーの形『都市型ドメヌ・ワイナリー』の先駆けにケントクワイナリーが挑戦する。

2023年、ここからが本当の挑戦だ。

【本件に関する問合せ】

ケントクワイナリー(大森産業(株)) 担当：森山錬一（もりやまけんいち）

T E L : 080-3693-2116 (携帯)

アドレス：i.moriyama@daishin-sangyo-gp.co.jp 厚木市上依知 2936 T E L : 046-245-0808